

土器は平箱約30箱分出土している。南部の3個の土壌からは主に奈良末～平安初の土師器・須恵器、ほかに平安初期の緑釉花文線刻皿、平安中期の灰釉壺各1点が、北寄りの2個の土壌からは瓦器が出土している。このほか、南部の西側の土壌から、奈良時代の緑釉の建物模型の勾欄部分の断片、およびガラス片各1点が出土している。

2棟の東西棟建物の時期・性格については資料が乏しく確定できないが、一応次のように考えておきたい。時期は、建物の規模、掘立柱建物柱掘形出土の奈良時代前期の須恵器などから、両者とも奈良時代と考える。性格については、両者が東妻を揃えていてSB02がSB01の建て替えと考えられること、食堂・十字廊（食殿）の後方に位置することから、両者とも大炊屋などに関係する建物と考える。

八幡院地区 調査地は八幡神社北側であり平城京六条大路南側溝と右京七条二坊一坪内の2ヶ所の土壌を検出した。溝幅は約4.0m深さ約1.7mである。南岸には径10cmほどの丸太を30cm間隔に打ちこんだ護岸施設がみられた。溝内堆積土から奈良時代の須恵器、土師器、瓦が少量出土した。溝から薬師寺南面築地までの心々距離は約34.0mである。

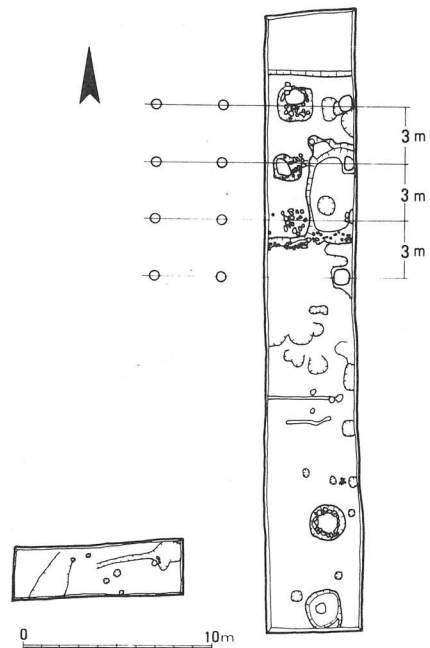
IV 大安寺の発掘調査

大安寺旧境内において家屋新築等にとまなう事前調査を2件行なった。

北僧房 調査地は従来の大安寺旧境内発掘調査結果からみて講堂を囲む三面僧房の東北隅で、北僧房の東端附近と推定される。調査は33m×5mの南北トレンチ、9m×3mの東西トレンチを設定し、約192㎡について行なった。調査の結果、発掘区北側で中房の一部を検出したが、南半分は中世以降の土壌や攪乱によってすでに削平され、大房を検出することができなかった。鎌倉時代初頭と考えられる井戸1基を検出したに留まった。

遺構：中房・北面中房の梁行通りの礎石および根石列を2列検出した。1列に4つの礎石があり、大梁をかける位置にも柱をもつ梁行3間の総柱建物である。

梁行の柱間寸法は10尺等間であり、『資財帳』の中房の記載や昭和41年度西面僧房調査の中房の柱間寸法と一致する。桁行の柱間寸法については、礎石が動いているため、正確な数値は求められないが10尺以上であろう。礎石は西列で2個、東列で4個の計6個を検出したが、いずれも原位置を移動している。東列礎石は、高低があり根石等の据付け痕跡が認められないことから、いずれも原位置から西に動いていると考えられる。西列礎石も若干移動しているものの、削平された南の柱位置をのぞいて、人頭大の根石をもった据付け痕跡が検出されている。礎石は東列南の逆截頭方錐



第6図 北僧房遺構配置図

形の凝灰石製礎石のほかは自然石を用いている。なお、梁行北側柱心から約1.6m北で遺構面に落差(20cm)があり、基壇状になっている。

井戸：発掘区南半で検出した。柱を転用したとみられる円形の井筒を用い、その上方は軒瓦・丸平瓦・塼・凝灰岩切石を積み重ね化粧している。井筒は、長さ約1.6m、径0.8mあり、半截してからくりぬいたもので、下端には地下水を入れるための仕口が設けてある。出土した瓦器によって鎌倉時代初頭のものと考えられる。

遺物：遺物は遺構面を覆う暗灰色粘質土から多量に出土した。その多くは瓦類で、土器は少ない。瓦類は、軒瓦・丸平瓦のほか鬼瓦・塼などが出土している。大半は、奈良時代のものであるが、若干、平安・鎌倉時代のものも混じる。125点出土した軒瓦のうち、いわゆる大安寺式とよばれる単弁16弁蓮華文軒丸瓦(6138)と、羊歯状に連なる3回反転均整唐草文軒平瓦(6712)の組み合わせが半数近くを占めている。

土器類は量的に少なく、いずれも小片である。土師器（皿・杯・甕・燈明皿）須恵器（杯・蓋・鉄鉢・壺・甕・浄瓶）のほか、瓦器・施釉陶器などが出土した。時期は、奈良時代中葉から鎌倉時代にかけてのものが混在する。施釉陶器には、灰釉円面硯・二彩皿・緑釉碗・皿・壺・青磁碗などがある。

他に埴輪が出土しているが、大安寺寺域内の杉山古墳のものである。

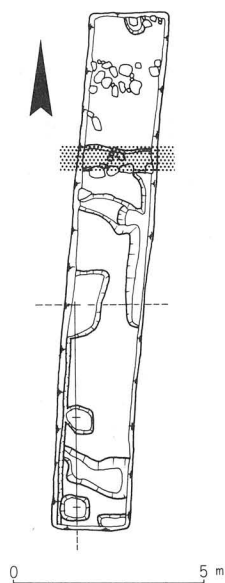
東僧房東方 調査地は、大安寺旧境内東面僧房の東側にあたる。

検出した遺構は、東西棟建物2棟、南北溝1条、土塋等である。検出面は地表下30～40cmの灰褐バラス層（地山）である。東西棟建物は2棟とも西妻柱のみの検出であったが、柱通りを揃えて配置している。南北溝は幅4m、深さ0.6mと大規模なものであり、東面僧房の外側を区画する位置にあたる。なお、凝灰岩製の切石（35×80cm）が据付けられた状態で出土したが、その性格は不明である。

V 法華寺旧境内の発掘調査（第95-1・4・5・7・8次）

法華寺旧境内における発掘調査を5件実施した。いずれも家屋改築にともなう事前調査であり、発掘面積も限られている。しかも後世の攪乱が著しく、顕著な遺構はわずかであった。95-4次は法華寺旧境内南半中軸線に近く、位置的に南門が想定できる場所での調査で、建物1棟、東西溝1条を検出した。

建物遺構は南北に並ぶ小穴列であり、柱間2.4m、2間分である。この小穴列の北3.0mの位置には、40×50cmの天端の平らな石があり、これを同一建物の礎石と想定することもできる。もしそうであれば、前述した3つの小穴はいずれも礎石の抜き取り痕跡であり、南北3間以上の礎石建物が復原できよう。建物については、発掘区が狭長なため、東西方向の規模は不明である。東西溝は幅50cm前後、深さ10cmが残存していた。溝の南側には面を揃えた川原石が並ぶが、北側ではその痕跡が明瞭でない。あるいは溝の南側に存在す



第7図 第95-4次遺構図